

# 日本社会心理学会会報

195号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 池田謙一

113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科 池田研究室

2012年10月3日

## 秋の社会心理学会大会(筑波大学)へのお誘い 日本社会心理学会第53回大会 つくばの地へ是非おいで下さい

大会準備委員会委員長 吉田富二雄

日本社会心理学会第53回大会は、11月17日(土)と18日(日)の2日間にわたり、つくば国際会議場(エポカルつくば)において開催いたします。

準備委員会は、現在、プログラム作成・論文集の公開(10月17日WEB公開予定)に向けて一步一步準備を進めております。10月には学部学生の協力を募り、11月17日の開催に向けて最終的な準備に入ります。

今年の開催は、会場設定の都合上、例年の9月から二月ほど遅れて、11月になりました。大学によっては入学試験の時期にぶつかり参加できないとの声も伺っております。そうした先生方には、誠に申し訳ないという気持ちと、お迎えすることができず本当に残念という気持ちでいっぱいです。お許してください。

さて準備状況の報告に移ります。

本年の最終発表件数は、口頭発表143件、ポスター発表280件、合わせて423件です。筑波大学では14年前に第39回大会を開催いたしました、その時の発表件数が182件(口頭70、ポスター112)でしたから、約2.3倍の発表数になります。個人発表の当初申込み数は459件。キャンセルは36件(7.84%)でした。ワークショップの申込みは9件です。11月開催ということで発表数が減るのではないかと心配しましたが、ほぼ前回の大会と同じで一安心でした。

大会1日目の総会終了後には、大会準備委員会企画のシンポジウム「東日本大震災において社会心理学者はどう活動したか」が開催されます。このシンポジウムは無料で一般公開される予定です。

2日目の最終セッションでは、特別ワークショップ「社会問題・社会政策と心理学との親しき関係を問い直す—日本と英国の比較を通して—」が開かれます。口頭発表・ワークショップは4階の6つの会場(小会議室401-405B)で2日間にわたり行われます。セッション分けについては出来る限り希望領域に沿うように努力いたしました。ポスター発表は2日目の午前と午後(2+2セッション)にまとめました。2階大ホール入口において1セッション70件の発表が行われます。

大会会場は、つくば駅からまっすぐに伸びるペDESTリアン「つくば公園通り」を歩いて約10分。つくば市は街の中心部に緑を取り込むモデル都市ですが、その動脈がペDESTリアン(歩行者・自転車専用道路)です。11月は自然が一段と映える季節です。つくばの自然を楽しみながら会場に向かってください。

また、つくば駅は秋葉原から45分。つくばエクスプレス(TX)の快適なスピードを楽しみながらおいで下さい。そして、総会は、1階多目的ホールで第1日目の昼に行われます。もちろんお弁当付。つくば(?)弁当を用意いたします。

懇親会は、国際会議場(エポカルつくば)からペDESTリアンをつくば駅方向に戻って、駅近くのオークラフロンティアホテルつくば(本館・アネックス)で行われます。500人収容の大宴会場「昴」を用意しました。皆様の熱気に満ちた歓談により大いに盛り上がることを期待しております。当日参加もありますのでぜひご参加ください。

11月のつくばは自然の美しさが一層深みを増す季節です。時間的余裕のある場合は、筑波山まで足を伸ばしていただければ紅葉も見頃です。また、つくば宇宙センターでは、管制室「きぼう」の見学コースもあり、宇宙服での記念撮影なども経験できます(要予約)。あるいは、つくば駅からの帰りにTX浅草駅で途中下車というコースはいかがでしょう。浅草雷門から吾妻橋を巡り、隅田川を渡る川風に吹かれながら、ライトアップされたスカイツリーを間近に眺めるのも一見です。東北地方太平洋沖地震の翌日に625mに達したスカイツリーは、本年2月29日に無事竣工し、その静かで力強い美しさによって、毎日、私たちに癒し励まし元気づけてくれます。震災以来、何かときつく暗い感じの毎日ですが、そんな元気の一端を持って、準備委員会は皆様を迎えたいと願っています。

気持ちの良い、研究発表と交流の場を準備するよう、精一杯務めるつもりです。

多くの会員の皆様のご参加を、心よりお待ちしております。

(よしだふじお)

## ● 今号の主な内容

- 【1面】日本社会心理学会第53回大会：つくばの地へ是非おいで下さい
- 【2面】第56回 公開シンポジウム：開催報告・参加記
- 【4面】事務局から会員名簿の送付、役員選挙のお知らせ  
東日本大震災に際して社会心理学者に何が出来たのか／何ができるのか（その5）
- 【5面】若手会員、声をあげる：藤原 健、高木大資、曹 陽
- 【7面】社会心理学を支えていただいている方々（その5）NHK 放送文化研究所
- 【8面】新入会者名簿など

## 第56回 公開シンポジウム

### 第56回 日本社会心理学会 公開シンポジウム

# 現代医療と心理学

## —医療現場におけるコミュニケーション—

本シンポジウムでは、今日の医療の諸問題に対して心理学・心理学専門家が貢献できること、医療者が心理学・心理学専門家に期待することの双方の視点から「現代医療と心理学」のかかわりや連携のあり方などについて考えます。



## シンポジスト

### 中野 重行

○大分大学名誉教授  
大分大学医学部創薬育業医療コミュニケーション客員教授  
国際医療福祉大学大学院 特任教授(創薬育業医療分野長)

【医療コミュニケーション  
—サイエンスとアートの視点から—】



### 松原 啓子

○大分県看護協会会長

【看護職がいざいきと働きつづけられるために  
—メンタルヘルス・サポートの観点から—】



### 久田 満

○上智大学総合人間科学部教授

【インフォームド・コンセント時代の患者・医療者関係  
—どうしたら分かり合えるのか—】



企画・司会 上野 徳美 (大分大学医学部教授)  
遠藤 由美 (関西大学社会学部教授)

生と共同で企画を担当することになりました。

今回のシンポジウムでは、今日の医療の問題に対して心理学や心理学専門家が貢献できること、医療者が心理学や心理学専門家に期待することの双方の視点からアプローチすることを目的としました。その際、「コミュニケーション」をキーワードにしてみました。

ご存じの通り、高齢社会の到来や現在の社会経済状況を反映して、医療や健康に対する人々の関心は非常に高く、医療や健康問題が連日のようにメディアに取り上げられ、医療や健康関連の本が多数出版されています。中にはベストセラーになるような本も少なくありません。一方、医療の現場では、さまざまな医療職の人たちが日夜、診療やケアに励んでいます。医療やケアは人と人とのコミュニケーションを基盤として成り立つ仕事であるため、医療者と患者・家族また医療者相互の良質なコミュニケーションがなければ、医療は成り立ちません。現場でやりとりされるコミュニケーションの質が信頼関係や治療効果などに大きく影響を与えと言っても過言ではないでしょう。ところが、そのような点に注目した報道や書籍はほとんどありません。

当日は、共同企画者の遠藤先生に司会をお願いし、3名の話題提供者にご講演をいただきました。まず、中野重行先生は医師としての豊富な臨床経験とご研究をもとに、医師-患者関係や医療コミュニケーションの有するサイエンスとアートの問題などについて、ご自身の医療観や患者観にも触れながらわかりやすくお話をいただきました。次に、長年医学部で心理学の教育、研究をされた久田満先生には、臨床心理学や社会心理学の立場からインフォームド・コンセントが重視される今日の患者と医療者の関係について、患者と医療者は分かり合えるのかという問題をご自身の貴重な入院体験も交えてユーモアたっぷりにお話をいただきました。ちなみに、病院や医療という異文化を理解するには入院が「最良の」体験だとのことでした（これは医学部の学生実習にも取り入れるとよいのではないかと考えます）。最後に松原啓子先生には、看護師そして看護協会会長の立場から安心・安全な医療・看護を提供するための人材の確保と労働環境作りについてご講演いただきました。看護現場の厳しい労働環境やストレスの実態、離職状況などを示され、看護師のコミュニケーションスキルの向上がメンタルヘルスにとって有用であることや、うつなどのメンタル不調が生ずる前の予防的取り組みが大切であること

## 《開催報告》

### 「現代医療と心理学：医療現場におけるコミュニケーション」開催

上野徳美

日本社会心理学会主催の第56回公開シンポジウムは、6月2日（土）午後、大分市のアイネスで開催されました。梅雨入り前の曇り空でしたが、幸いにも雨にはならず、多くの方々にご来場いただきました。

今回のシンポジウムは、「現代医療と心理学：医療現場におけるコミュニケーション」というテーマで、医療と心理学のかかわりや連携のあり方について考えようとするものでした。心理学や社会心理学は医療に関していろいろ貢献ができるのではないかとこの趣旨で、昨年7月初旬、常任理事会から公開シンポジウム開催のご依頼がありました。今回は上野が医学部に所属し、医療者のバーンアウト予防の研究などを行っていることから、遠藤先

などを強調されました。それぞれの先生のお話は、現在の医療や看護のかかえている問題や課題を浮き彫りにすると同時に、心理学や社会心理学への期待と心理学、社会心理学が医療問題に貢献できることの双方についてとても示唆に富む内容でした。

今回は、指定討論者を設けず、代わりに、フロアからの質問や意見を重視したフロア参加型シンポジウムを目指しました。話題提供者とフロアとの討論を通して、医療と心理学のかかわりや連携のあり方や、よい医療とは何かをみんなで考える場になればと思ったからです。このもくろみは成功し、心理学専門家が医療現場に入ることで、医師-患者・家族関係を含め、どのような貢献ができるのか、また、博愛主義的パターンリズムから医療上の最終決定は患者にあるとする今日のインフォームド・コンセントの考え方に至った背景や矛盾をどう考えればよいか、人との違いや人と違っていいと考えるにはどうすればよいかといった質問や意見が参加者から出され、それらに対して3名の話者提供者がそれぞれのお考えや意見を述べられ、広がりのある討論となりました。

学会員や一般の方々、学生さんなど参加者の皆さんは、講演とその後の討論を熱心に聞き入っておられました。会場で実施したアンケートには有意義であったという感想が多く寄せられ、医療者が心理学、社会心理学に期待する問題や、医療というフィールドで心理学や社会心理学が寄与できる事柄の一端がクリアになったシンポジウムであったと確信できました。

最後になりましたが、本シンポジウムの開催にあたり多くの方々からご助言・ご支援をいただきました。安藤会長や常任理事の先生方をはじめ、事務局や会員の皆様、現場スタッフ、そして会場にお越しいただいた皆様に心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

なお、当日の発表資料を日本社会心理学会のホームページ上で公開しておりますので、ご覧いただければ幸いです。

(うえのとくみ・大分大学)

#### 《参加記》

### 医療現場と心理学の接点 ―社会に求められ、社会に貢献できる社会心理学を目指して―

縄田健悟

最近、組織のチームワーク研究に着手したこともあり、医療や組織の現場におけるコミュニケーションのあり方は、現在私がたいへん注目しているトピックです。この機会に医療現場における心理学の役割に関して勉強させていただこうと思い、本シンポジウムに参加いたしました。以下、感想を記したいと思います。

1人目の話題提供者である中野重行氏は、医師の立場から、現場実践と実証研究をともに取り上げながら、サイエンスと感性のバランスの重要性を中心に医師と医療のあり方に関するお話をされました。中野氏は、サイエンスの網からこぼれ落ちた部分としての感性を重視し、その上でサイエンスを軽視することなく、「サイエンスに基づくアート」の重要性を指摘しておられました。普段私はハードな科学者寄りの考え方をし、個人の集合体から法則や理論を抽出することを中心に研究を行なっています。そのため、その法則や理論を具体的な個人に当てはめて、実際に活かす

という視点を取ることはあまりありません。その意味で、中野氏のお話は、現場における科学実践のあり方に関する示唆として、たいへん勉強になりました。また、中野氏は、心と体が密着につながっていることから、医師が看過しがちな心の面の重要性を繰り返し指摘されていました。その一方で、心理学者は体の面の重要性をむしろ忘れがちであるため、心と体の相互依存的で全体的なあり方を考慮する必要性を感じました。

2人目の話題提供者である久田満氏は、患者の立場から、最初に、インフォームド・コンセントという考え方が日本に導入された歴史的な経緯をお話しされました。次に、自身が勤めていた大学病院に患者として入院した個人体験をお話しされました。ここでは久田氏が自身の勤めていた大学病院だからこそ生じた奇妙な役割のズレが語られていました。入院する前には、その病院の医療者との関係性は、「教員」対「医学・看護専攻の教え子」という関係性でした。そこから、入院し、手術着を着て台に横たわるという“儀式”の中で、それまでの関係性とは異なる「患者」対「医療者」という役割を身につけました。そうすることで、診察台に登ることで緊張するといったように、久田氏自身が患者らしく振る舞うようになったといえます。このような医療者と患者という役割認知に関する考え方に関しては、私はこれまで考えたことがなく、たいへん興味深く伺いました。

3人目の松原啓子氏は、看護師の立場から、看護師の離職の原因解明とその防止策に関するお話をされました。看護師が激務であることは、これまでも聞きかじってはいたのですが、松原氏がお話になった実態は想像以上に過酷なものでした。松原氏によると、看護師の23人に1人が過労死危険レベルの超過勤務状況にあるといえます。最も多く挙げられた離職理由は「健康上の問題」だそうですが、その背景には健康に問題をきたすような厳しい労働環境があるのは想像に難くありません。さらに、離職による看護師の慢性的不足は、残った看護師のさらなる負担増加につながっていきます。このような状況を改善すべく、松原氏は研修などのさまざまな取り組みをなさっているとのことでした。

以上、三者三様の立場からの発表を聞いて全体として感じたことは、当たり前ながら、立場が変われば見方も変わるということであり、視点取得は難しいということでした。本シンポジウムでは、三氏が提供された話題は、どれも当事者から語られないと気づきにくい重要な側面です。逆に言うと、三氏それぞれが語られたお話は、他氏の話では看過されがちな側面ともいえます。そのため、今後よりよい医療現場の改善を目指すためには、医師、看護師、患者という今回の3つの立場（さらには他の医療者）において問題となる点をお互いに考慮した上で改善を進めていくことが求められるように思います。その意味で、本シンポジウムは、普段は気づくことのできない当事者の視点を共有し、より多面的かつ包括的な医療現場の改善を考えていくための大変良い機会となったと私は感じました。

最後に、本シンポジウムの本筋から少し話がずれることを承知の上で、自戒を込めて、(実は一番心に残っている)感想を記しておきたいと思います。心理学者ではない中野氏と松原氏の両氏は、心理学への期待として、臨床心理学およびその実践家として臨床心理士への期待を繰り返し述べておられました。社会が心理

学に求めているものは、やはり臨床家であるという現実、もっと社会心理学者である我々自身が考えていくべき問題だと思います。もちろん、最後の討論では社会心理学が貢献する医療領域についても議論されておりましたし、実際に社会心理学は社会に大きく貢献できる研究領域だと思います。その一方で、私自身がこれまで社会に貢献する研究が行えてきたかと問われると、正直なところあまり自信がありません。学術研究者のみが集まる

学会大会ではなく、現実の社会との接点を目指すこのようなシンポジウムに参加するたびに、私はいつも忸怩たる思いを抱きます。基礎研究であれ応用研究であれ、社会に求められ、社会に貢献できるリアルな社会心理学研究を行っていかう、という自らの所信表明を最後に記しておきたいと思ひます。

(なわたけんご・九州大学)

## 事務局から会員名簿の送付、役員選挙のお知らせ

今年度発行の会員名簿を11月中旬に送付する予定であります。その際、第27期役員選挙の台帳となる選挙権および被選挙権を有する会員の一覧表も同封致します。それらをお受け取りになりましたら、ご自分の記載についてご確認くださいようお願い致します。もし修正点がございましたら、事務局(jssp-post@bunken.co.jp)までご連絡ください。

なお、第27期役員選挙は、2013年1月に実施することを予定しております。ウェブ投票となります。ぜひ投票くださるようよろしくお願い致します。

## 東日本大震災に際して社会心理学者に何が出来たのか／何ができるのか

### (その5)

関谷直也

東日本大震災では、死者15,870人、行方不明者2,814人(2012年9月11日現在)という甚大な被害をもたらした。この災害で何が問題であったか。人間行動に着目して考えてみれば、やはり究極的には津波からの避難、福島原子力発電所事故からの避難が最大の問題であった。

なぜ避難しなかったのか、避難できなかったのか。なぜ避難を巡って混乱が続くのか。

近年、災害研究の領域においては、土木工学(地震工学や河川工学)や理学(地震学や気象学)の人々が調査を基にこの人間行動を研究対象として扱おうとする。ただし、それは「災害時の人間の行動・心理を理解しよう」という目的から出てくる問題関心ではない。

災害被害を低減するための技術開発は、従来、ハード整備(堤防や道路の構造設計や建築物の改良)が中心であった。だが近年、外的制約として公共事業に対する批判や予算の減額などが現実的課題として顕在化し、人的被害を防ぐために人々の避難行動を変数として扱わざるを得なくなってきた。工学としては「ソフト」技術という人の行動を一つの変数として変化させることが可能かという問題関心から、また理学としては自分たちの知見や発信する情報がきちんと理解されているかという問題関心から、この分野を研究するようになってきた(ゆえに外部に放射性物質が放出する事故が起きないとされてきた原子力事故においては、避難行動は研究対象ではなかった)。

ゆえにロジックは荒い。啓蒙主義的な見方をとるばかりか、素朴な「心理」への理解だけでこれを乗り越えようとしている。

たとえば、人々が「正常化バイアス」を持っているがゆえに、往々に危険を過小評価するものだ、津波で避難しないのは「人々

の危機意識が低いからだ」という前提から議論をスタートする。だが「人々の危機意識の低さ」は原因とみるか、表層的な結果と見るかによってその解決策は変わる。たとえば危機感をもったからこ子どもや近親者を助けようと地震後に探す(援助行動)という行動の結果、自身の避難行動の重要度認知は低下する(認知的不協和)。だから単純に解決できるものではない。

また気象庁が、直後予想される津波の高さとして「岩手県3m、宮城県6m、福島県3m」との予想を伝えたということが、その後の避難行動を鈍らせたのではないかと大きな問題となってきた。気象庁でもこれが問題視され、次の大きな津波災害のときはこの数字を言わないこととなった。しかしながら、国土交通省第三次現況調査など様々なアンケート調査からみれば「大津波警報を知った媒体」としては防災行政無線から情報を得たという人が圧倒的であるが、実際に日本災害情報学会調査団が行った調査からは津波被害の大きかった沿岸43自治体のうち津波の予想の高さを伝えたのは11自治体にすぎないことがわかっている。またその放送内容をきちんと正確に聞き取った人は半数程度であったこともわかってきた。かつ、ラジオやテレビから大津波警報を知った人は様々な調査で2割程度であり、ましてやインターネットやソーシャルメディアを避難の手がかりとした人は数%程度である。調査結果から、多くの人は「揺れ」で異常さを感じとって避難しており、情報を理解して避難しているわけではない、つまり予想される「津波の高さ」を低く伝えたことが「多くの人の」避難行動を阻害したとはいえないのである。

また、この津波災害後、車で避難して渋滞に巻き込まれ、多くの人が亡くなったことが問題視されている。だが先述の国交省の調査では約半数の人々が自動車で避難しているし、渋滞すら発生していない自治体も1/4程度ある(先述の日本災害情報学会の調

査)。「車」避難が「一概に」危険ともいえない。にもかかわらず「車避難は危険」という言説がまかり通っている。

工学や理学の分野は、減災や防災、そのためのサイエンスコミュニケーションが目的であるから、それらの前提である緊急時の人間行動への理解については素朴なまま、もしくは彼らにとって都合よく理解されている(選択的認知)。その上で人々への啓発、防災教育が行われ、次の被災を防ぐことが試みられている。「津波でんでんこ」(人々がばらばらに逃げること)という古典的教訓の伝承や「思い」のある研究者の経験則に基づく「個人技」「職人芸」で乗り越えているのが実態である。端的にいえば、人々の心理に対する素朴な理解を元に、この災害を「しろうと」理論だけで乗り越えようとしているのが現状である。

マスメディアもわかりやすい「教訓」や「絆」というヒューマンドラマをつくる。企業、NPOなども助かった方々の支援、復興支援に力を入れる。そして、なんとなくこの災害を理解したつもりになり、災害それ自体を忘れていく。あえていえば、我々はこの災害を、復興支援というドラマと、忘却の力と、「人間の心

理」に対する「しろうと」理論によって乗り越えようとしている。この災害でなぜこれだけ多くの人が亡くなってしまったのか、原子力災害で混乱と不安の中の避難しなければならなかった実態を直視しないままに。

東日本大震災は、様々なことを人間の心理から丁寧に理解する必要があることを改めて教えてくれた災害である。だが研究蓄積のない災害時の行動という「非日常」は、なかなか研究対象とされにくい。現在、社会科学的災害研究は、避難生活の心理・生活支障の研究や、復興におけるコミュニティの研究、リスク認知などより一般化しやすい心理に研究が集中している。

緊急時の情報処理、避難行動などは、本来は社会心理学者が徹底して研究すべき分野である。この災害を教訓にすれば、災害時の心理、避難行動をはじめ災害時の諸問題に真正面から取り組み、学問的知見を蓄積し、次の災害被害を減らすことこそ、今、社会心理学者として、なすべきことなのではないかと思う。

(せきやなおや・東洋大学)

## 若手会員、声をあげる

腹を割ろう、議論をしよう：院生リーグへのお誘い

藤原 健

「人はなぜ走るのか」という本がある(ベルンド・ハインリッチ著 鈴木豊雄訳)。私の大好きな本の1つである。著者はヴァーモント大学で教授を務める生物学者である。何とこの著者、1981年、自身が41歳のときに100kmマラソンの全米チャンピオン(兼マスターズ世界記録保持者)になっているというから驚きである。細かい記録を並べても仕方ないが、そのレースではフルマラソン(42.195km)を2時間42分で通過し、100kmは6時間38分21秒だったそうだ。ちなみに、アマチュアランナーではフルマラソンを3時間切れれば一流とみなされる。1kmを4分切り続けるとは(100mなら24秒を切る!)凄まじいペースである。私がこの本を好きなのは、同じランナーとしての(紹介が遅れたが私も走る研究者の端くれである)偉業を讃えるためだけではない。著者は生物学者として他の持久力型の昆虫や動物を観察し、その生理学的な構造と生態環境を踏まえた考察から、人が走るということを最適化する方略を得ているのである。マラソンというテーマ達成のために生態学という一見奇想天外な視点からアプローチし、見事に成果を残してみせたその記録が収められていること

が大いにお気に入りなのである。

さて、そろそろ本題に入ろう。私は、ハインリッチ教授のように、あるテーマに対して柔軟で多様なアプローチを試みる姿勢こそ研究活動にとって重要であると考えている。そこでお勧めするのが「院生リーグ」である。院生リーグは年次大会の前後で毎年行われる、院生だけの研究会である。創始者は北大OBの寺井滋さんという方だ。その発端は2004年に行われた社会心理スキーでの酒宴だとお聞きした。「大学や指導教員が違えば研究観も違う。ただし、それによって代理戦争みたいになるのではなく、腹を割って議論できる院生の仲間を作りたい。だから院生リーグはマイナーリーグのリーグではなく、院生同盟の意味で院生リーグなんです」と寺井さんは教えてくださいました。そんな熱い想いに賛同した院生が集い、第1回(この年の年次大会は北星学園大学で行われた)ではすでに参加者が40人を超え、主に北大、東北大、東大、京大、広大、九大等の院生が参加していたそうだ(学部生も含まれていたという)。

昨年度は恥ずかしながら私が幹事を務めさせていただいた。悪天候の中でも参加者は60名に達し(うち発表者が8名)、二教室に分かれて運営する規模であった。私自身過去4回の院生リーグに参加し、大学が違うだけでこんなにもテーマとアプローチ

が違うものかと幾度となく知的興奮を味わい、また、少なからず「腹を割った議論」にも参加してきた。夜は忌憚なくお酒を酌み交わせるのも醍醐味といえる。今年の幹事は一橋大学の井上裕珠さんをお願いした(連絡先:sd111003(at)g.hit-u.ac.jp)。すでに秋葉原に三教室を確保したという敏腕幹事である。この会報が発行される頃には研究発表の受付は終了している可能性が高いが、興味を持った院生の方はぜひとも足を運んでいただきたい。他大学には異なるテーマ、アプローチがあることを学ぶだけでも十分に価値のあること請け合いです。そして願わくば、腹を割って議論に参加していただきたい。今年も院生同盟の仲間と会えることを心から楽しみにしている。

(この原稿を書くにあたり、北大OBの寺井滋さん、およびNTTコミュニケーション科学基礎研究所の松田昌史先生に多大なるご協力をいただいた。記してここに感謝いたします。なお、院生リーグの面白さや企画当時の熱い想いが伝わってなければ、全て私の責任である。院生リーグの存在は社会心理学を学ぶ大学院生にとって本当に財産であると、筆を執って改めて実感した次第である。)

《2012年度社会心理学院生リーグ開催情報》

【日時】11月16日(金)14:30~18:00頃

【場所】首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス

([http://www.tmu.ac.jp/university/campus\\_guide/access.html](http://www.tmu.ac.jp/university/campus_guide/access.html))

【会費】無料

幹事より：大学院生であれば誰でも参加は自由ですが、大方の人数を把握したいと考えております。ですので、お越しの際はぜひ幹事までご連絡をお願いいたします。

(ふじわらけん・大阪大学)

## 海外留学中に感じたこと

高木大資

私は現在、ハーバード公衆衛生大学院で客員研究員として研究を行っております。今回は貴重な誌面をお借りして執筆の機会をいただきましたので、私がアメリカ滞在中に多様な学問領域の研究者と交流して感じた雑感について述べさせていただきます。私が研究を進めていく中で感じた悩みについても告白させていただければと思います。

公衆衛生学は様々な集団の健康を扱う分野であり、私の所属している研究室では主に地域の社会的特徴によってそこに住む人々の健康がどのような影響を受けているのかについて研究を行っています。健康と言った場合には身体的および精神的な疾患を一般的には思い浮かべられるかと思いますが、貧困などの社会的な病理も公衆衛生学の研究対象に含まれます。私自身は現在、人々の犯罪被害をアウトカムとした研究を行っています。具体的に言うと、犯罪には起こりやすい場所と起こりにくい場所があり、つまり犯罪件数は地域間で分散があり、この分散を説明する要因を探ろうとしています。地域での犯罪発生に影響を与える要因としては、物理的な面では街灯の設置によって暗がり無くしたり道路の見通しを良くするといった都市工学的なアプローチが有効ですが、今は心理社会的な面の要因として、地域の社会関係資本に注目して研究を行っています。社会関係資本とは、人々の間のネットワーク、社会的交換の際の信頼や互酬性といった地域の特徴であり、これらが豊富な地域では人々の間の相互作用が増加し、有効な社会的統制が行われ、なおかつ警察などの公的な機関との協働がしやすくなるために、犯罪被害が抑制されます。その背景には、人々のネットワークの

質によって協力行動の現れ方が異なったり、一般的な信頼や互酬性の規範によって協力行動のインセンティブが高められたりといったメカニズムがあり、その点では、非常に社会心理学的な事象を扱っていると言えます。

ただ、私の研究の目標は「犯罪を減らすこと」ひいては「社会をより良くすること」であって、そのためにはある特定の学問分野の手法のみにこだわる必要はないと思っています。利用できる学問領域の知識は全て総動員して研究を行うのが理想的といえるでしょう。犯罪抑制にかかわっている学問分野は、犯罪学、公衆衛生学、社会学、心理学、都市工学、建築学、空間情報科学、地理学など、挙げればキリがありません。現在は、研究の際にはこれらの学問領域の研究者と共同で研究を行い、彼らから多くの知識を吸収させていただいています。どのような研究領域においてもそうですが、ある現実的な社会的目標を達成しようとしたとき、学問間の境界は非常にあいまいになり、多くの学際的知識が必要とされるようになってきます。そのため前述の多くの学問領域の知識を勉強していくうちに、だんだんと自分の学問の軸がわからなくなってくるのも事実です。そういった状況でも社会心理学に自身の確固たる学問的アイデンティティを感じていられればよいのですが、時々、自分は「社会心理学者」のままでよいのだろうかと思ってしまうことすらあります。

これはあくまで私の個人的な見解なのですが、社会心理学はある社会的事象について現状を記述する、もしくは「なぜそのような現状なのか」ということを説明するというアプローチが主流だと思います。メカニズムを詳細に説明するという点で、“工学的”な側面のある学問だと思います。一方で、ある社会問題を解決したいと考えたとき、社会に有効な仕組みや制度を実装する“工学的”なアプローチも必要とされてきます。社会心理学は、この仕組みや制度の提言にもしっかりと貢献できる学問だと思いますが、まだその点に関しては十分に行われていないと感じています。もしかしたら、それは社会心理学の仕事ではないとおっしゃる方もいるかもしれません。社会心理学は社会についての記述と説明を蓄積するのが仕事で、新たな仕組みや制度を提言

するのは行政学や政治学の仕事だとおっしゃられるかもしれません。たしかに、各学問領域のスペシャリストたちの分業こそが社会を良くしていくのに最良な方法なのかもしれません。もちろん、その際には異なる学問間の橋渡しの役割をする学問領域も必要で、実際多くのそのような学問も発展してきています。

ただ、私がアメリカに来てこれまで自分が所属していた学問分野とは異なる分野の研究者たちと交流することによって、私はそれらを全て統合して行える“ジェネラリスト”になりたいという大きな夢を抱くようになりました。ジェネラリストとは、異なった分野の視点を複数持ちどのような角度からでも研究・実践が行える学者、全ての学問領域の研究者と一緒に研究できる学者です。自分が専門としている研究領域のジャーナルですら、一本の論文を書くのに大変な苦勞を要する程度の私の能力からすると、この夢は途方もないものです。また、場合によっては10人のジェネラリストの価値は1人のスペシャリストに及ばないこともあるのかもしれませんが。実際、ジェネラリストを目指すことが自分の今後の研究者生活や社会への貢献にとってプラスになるのかどうか、まだまったくわかりません。しかしこのような挑戦が、社会心理学の新たな可能性を生み出すことにもなるかもしれません。そのような可能性を見出すために、私はこれからも多くのことを見聞きし、研究し、視野を広げていけるように努力を続けていきたいと思っています。

これが海外で多くの学問分野の研究者たちと交流して得た現時点での私の純粋な感想です。まだまだ浅学の駆け出し研究者の一意見ですが、少しでも共感してくださる方がいらっしやれば幸いです。

(たかぎだいすけ・東京大学大学院／ハーバード公衆衛生大学院)

## 中国科学院心理研究所へのお誘い

曹陽

関西大学名誉教授高木修先生に院生として指導していただきました曹陽と申します。2007年に博士学位を取得したあと、関西大学のグリッドコンピューティング実験センター(2005年-2010年)及びソシオネットワーク戦略機構、大阪商業大学JGSS研究センターでのポストドク経歴を持って、

2011年1月に現職の中国科学院心理研究所に着任しました。当初の所属は、「応用発展部」及び「中国科学院心理健康重点实验室」の助理研究員を兼任していましたが、今年の6月に行われた構造改革に伴って、「応用発展部」から新しく設立した「社会心理と行動調査センター」へ転属することになりました。

中国科学院心理研究所における心理学とは、長い間に「自然科学」に位置づけられて、社会科学のアプローチを取り入れる仕組みがほとんどありませんでした。しかし、現在は、新たな構造改革を行うことにより、自然科学と社会科学、基礎研究と応用研究に関わる包括的な心理学を大きく発展させるために、研究所における人員配置や研究費配分などの調整を行っています。その中で、今までに取り組んでいなかった日本との共同研究や学術交流を図りたい意欲があるため、私と李岩梅（一橋大学村田光二教授の元院生）が組んで、今後の仕事に対応することに当たっています。二人とも日本社会心理学会の出身者であるので、この場を借りて会員の皆様にご挨拶させていただきたいと思います。また、「災害心理学」と「インターネット心理学」について、日中両国の研究者による共同研究を次のように呼びかけたいと考えています。

## 1. 「巨大災害の防災・減災に関する学際的研究」

巨大災害の被災過程と人的要因の分析、災害後の心の問題とケア、向社会的行動、防災・減災教育のためのツールと手法開発などを含めます。

## 2. 「情報通信技術の利用に関する社会心理学的研究」

情報通信技術を利用した社会ネットワークの特徴及びコミュニティの形成、情報通信技術の利用が心理健康に与えるポジティブ・ネガティブ影響の分析、ネット社会における社会関係資本の形成メカニズムなどを含めます。

私が現職に着いて以来、農村から都市に移住した「農民工」の子どもを対象とする大規模調査（16550人）と四川5.12大震災の被災地での子どもを対象とした追跡調査（北川地域315名、2008-2012年計5回；周曲地域3000名、2010-2012年計3回）のデータ整理と管理及び調査全般の責任者として努めています。正直に言うと、最初は入力済みのデータに信憑性の問題があることを判明した瞬間、ショックでたまらない時期がありました。その後、原因を突き止めるためにも、データ入力の依頼先を見学し、調査票の設計不備や業務依頼の手順などのミスを確認したうえで、すべてのデー

タを再入力あるいは再チェックする作業を行いました。同時に、社会調査とデータ処理に関するトレーニングや講座を開いたりして、人材育成と組織化にも力を入れました。今後は、共同研究の利便さを図るため、調査票を英語と日本語へ訳して、データとともに提供するなど計画を立てようとしています。

共同研究の支援枠組について、国レベル、組織レベル、個人レベルを分けて、戦略的に考案する必要があると思います。現在は、研究所の所内経費で国内外の共同研究募集、中国政府の資金による外国研究者の招待及び国際会議の開催、日中両国政府による共同研究支援などの機会が十分にあると思います。人的・物的に整備しつつ中国科学院心理研究所に対してご興味がある先生方は、どのようなお問い合わせでも構わないので、お気軽にご相談いただければと思います。

連絡メールアドレス：QVG02310@nifty.com  
(曹宛て)

研究所のウェブサイト：

<http://english.psych.cas.cn/>

(そうよう・中国科学院心理研究所)

# 社会心理学を支えていただいている方々：その5

## NHK 放送文化研究所

### 計画管理部 三矢恵子

NHK 放送文化研究所は、1946年6月に設立されて以来、60年以上にわたり一貫して、放送番組や放送制度、世界の放送事情、ジャーナリズムの動向、放送のことば、放送の歴史に関する研究、視聴者の意向を把握する世論調査など、公共放送を支え、豊かな放送文化を創造するためのさまざまな調査研究に取り組んでいます。

研究所は、メディア研究部、世論調査部、計画管理部の3部分かれ、メディア研究部と世論調査部は、調査・研究の内容によって、さらに8のグループに分かれていますので、グループごとに、調査研究の内容を簡単に紹介したいと思います。

### メディア研究部

#### メディア史研究

放送史研究、放送関係者の証言ヒアリング、放送史料の収集・保存、「NHK年鑑」の編集

#### 海外メディア研究

世界の放送制度や政策、公共放送の理念・サービス・課題、各国のデジタル新サービス、報道倫理等の調査研究、「データブック世界の放送」の編集

#### メディア動向

国内のデジタル放送の今後、デジタルコンテンツの可能性と課題、国内のジャーナリズム論等の調査研究

#### 番組研究

番組の内容や見られ方の調査研究、教育放送のサービスに関する調査研究、地域放送に対する視聴者ニーズ等の調査

#### 放送用語・表現

現代日本語の実態調査、放送表現の改善のための研究、放送用語のデータベース化、辞典の編纂（「アクセント辞典」等）

**世論調査部**

**視聴者調査**

全国個人視聴率調査、国民生活時間調査、放送意向調査（「日本人とテレビ調査」等）の企画・分析

**社会調査**

社会・政治・生活意識に関する世論調査（「日本人の意識調査」等）、国際比較調査（「ISSP 国際比較調査」）の企画・分析

**調査システム**

サンプリング、全国世論調査の実施と管理、調査員の育成・管理、調査方法に関する研究

このほか、グループをまたがる調査研究として、「“子どもに良い放送”プロジェクトによる追跡調査」、「番組レビューSNS サイト“teleda”の実証実験」などがあります。

以上のような通常の調査研究のほかに、2011年度は特に、3月11日に発生した東日本大震災に関する各メディアの報道状況や人々の情報行動等についての調査研究にも重点をおきました。主な調査研究は以下のとおりです。

- ・東日本大震災発生直後のテレビの放送内容の分析
- ・東日本大震災発生後1か月間の海外ニュース番組の内容分析
- ・東日本大震災における安否情報システムについての調査
- ・テレビ・ラジオや防災無線で津波避難呼びかけに使われた表現の調査
- ・気象庁や被災した自治体・メディアがいつどのように、想定外の事態であることを認識してそれを伝えたかの調査
- ・東日本大震災後の災害FM局についての調査
- ・震災後の人々の防災意識、価値観などを把握するための全国規模の世論調査（「防災・エネルギー・生活に関する世論調査」）
- ・震災被災者のメディア利用についてのインターネット調査
- ・日本に在住の外国人が震災時にどのような情報接触行動をとったかのアンケート調査

このような調査研究の成果を還元するために、当研究所では「放送研究と調査」（月刊）、「NHK 放送文化研究所年報」「放送メディア研究」「NHK データブック世界の放送」（以上、年1回）などを定期的に発行しています。このほか、「日本人の生活時間2010」「現代日本人の意識構造」「NHK 漢字表記辞典」など、不定期の刊行物でも成果を公表しています。

最近では、研究者をはじめとして、もっと多くの方々に調査研究の成果を役立てていただこうと、公表の媒体を広げています。2011年から「放送研究と調査」「NHK 放送文化研究所年報」に掲載した論文や報告は、NHK 放送文化研究所のホームページ（<http://www.nhk.or.jp/bunken/>）で公開するようになりました。

また、2010年から、特に学術研究への貢献をいっそう図るため、世論調査部が実施した社会や政治、生活に関して人々の意見や態度を尋ねた世論調査の中から、SSJDA（東京大学社会科学研究所日本社会研究情報センターの学術データベース <http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/>）に調査実施後一定の期間において、ローデータを提供するようになりました。まだ提供している調査の本数は多くはありませんが、その中には1973年から5年ごとに実施している「日本人の意識」調査のデータが含まれています。

当研究所が1993年から参加しているISSP国際比較調査のローデータは、すでにドイツの社会科学研究機関のGESISのアーカイブに利用申請することができますので、それとも合わせて、活用していただきたいと思っています。

NHK 放送文化研究所と社会心理学会のつながりは、現在は当研究所の所員による通常の学会員としての活動にとどまっております。正直申しまして、それほど強いものとはいえない状態です。今回のこのような場が、社会心理学会員の皆様に、当研究所の調査研究成果をこれまで以上に活用していただくきっかけになれば幸いです。

（みつやけいこ）

\* \* \* \* \*

**会員異動**

（2012年4月21日～2012年9月28日）

**■新入会員**

**《正会員》**

・一般会員

大石和男（立教大学コミュニティ福祉学部教授）、大澤英昭（日本原子力研究開発機構地層処分研究開発部門知識化グループグループリーダー）、岡田明穂（AMM 代表、中小企業診断士）、小川祐樹（産業技術総合研究所サービス工学研究センター特別研究員）、菊地史倫（(公財)鉄道総合技術研究所

研究員）、境野友美（文部科学省大臣官房政策課情報化推進室非常勤職員）、櫻井研司（名桜大学・沖縄国際大学非常勤講師）、塩谷芳也（日本学術振興会（大阪大学）特別研究員（PD））、杉浦直樹（株式会社オプトマーケティング本部所属）、星地優花（キャノンソフトウェア株式会社）、田代 豊（名桜大学国際学群教授）、田渕 恵（関西学院大学大学院文学研究科博士研究員）、田部井明美（東京国際大学商学部非常勤講師）、田村芳則（新潟県福祉保健部コロニーにいがた白岩の里児童部治療訓練主査）、土本将貴

（北星学園大学大学院社会福祉学研究科研究科助教）、土井孝典（学習院大学文学部心理学科助教）、中村陽人（福島大学人文社会学群経済経営学類准教授）、野口聡一（宇宙航空研究開発機構職員）、パク ジュナ（東京大学日本学術振興会外国人特別研究員）、日吉昭彦（文教大学情報学部広報学科専任講師）、福井英次郎（慶應義塾大学慶應ジャン・モネ EU 研究センター共同研究員）、藤井慎二（京都大学大学院人間・環境学研究科研究生）、山口千晶（合名会社神宗正社員・事務所）、山本仁志（立正大学経営学部



准教授)

・大学院生

青木康彦(駒澤大学大学院人文科学研究科)、石川泰地(名城大学大学院総合学術研究科)、岩渕将士(東北大学大学院教育学研究科)、大下知世(山口大学大学院教育学研究科)、太田洋介(大阪市立大学大学院文学研究科)、岡鼻千尋(香川大学大学院教育学研究科)、嘉瀬貴祥(立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科)、勝村史昭(一橋大学大学院社会学研究科)、上條菜美子(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、彼谷直子(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、川村幸弘(駿河台大学大学院心理学研究科)、金 惠璘(北海道大学大学院文学研究科)、草海由香里(上越教育大学大学院学校教育研究科)、倉矢 匠(東洋大学大学院社会学研究科)、小谷侑輝(北海道大学大学院文学研究科)、小林智之(同志社大学大学院心理学研究科)、小松瑞歩(北海道大学大学院文学研究科)、佐伯政男(慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科)、佐藤広弥(一橋大学大学院社会学研究科)、佐藤雄一(目白大学大学院心理学研究科)、佐名龍太(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、柴田健史(東京大学大学院人文社会系研究科)、鄭 顯玉(三重大学大学院教育学研究科)、末吉南美(関西学院大学大学院文学研究科)、杉野珠理(東京女子大学大学院人間科学研究科)、須藤竜之介(明治学院大学大学院心理学研究科)、高原龍二(大阪大学大学院人間科学研究科)、鷹阪龍太(東洋大学大学院社会学研究科)、武井恵亮(東京大学大学院人文社会系研究科)、武井友希(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科)、竹本圭佑(東京大学大学院人文社会系研究科)、田中大貴(神戸大学人文学研究科)、玉井颯一(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、津留寛(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、寺島 圭(関西学院大学大学院文学研究科)、寺嶋裕登(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、長井るな(東京女子大学大学院人間社会科学研究科)、中西彩之(立正大学大学院心理学研究科)、新岡陽光(東京大学大学院心理学研究科)、新井田恵美(東洋大学大学院社会学研究科)、野本可奈(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、芳賀道匡(日本大学大学院文学研究科)、早川裕矢(関西国際大学大学院人間行動学研究科)、平川奈々(東北大学大学院文学研究科)、平野美

沙(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、福島慎太郎(京都大学大学院地球環境学研究科)、藤井達也(武蔵大学大学院人文科学研究科)、前 奈緒子(京都大学大学院地球環境学舎地球環境学専攻)、正木郁太郎(東京大学大学院人文社会系研究科)、松原健太(群馬大学大学院社会情報学研究科)、三ツ矢慎平(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、宮川裕基(帝塚山大学大学院心理学研究科)、宮田千聖(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、毛呂准子(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、矢野麻梨奈(立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科)、山田順子(北海道大学大学院文学研究科)、山田尚樹(筑波大学大学院システム情報工学研究科)、劉 兵(滋賀大学大学院経済学研究科)、趙 紫薇(神戸大学大学院国際文化学研究科)、陸 英善(東洋大学大学院社会学研究科)、SHEN HAO(立命館大学大学院文学研究科)

#### ■退会者

伊原健太郎、釜谷真理恵、木村 裕、今野順、中込充信、西本志乃、黄 佳、丸山久美

#### ■所属変更

飽戸 弘(放送倫理・番組向上機構(BPO)理事長)、西道 実(奈良大学社会学部)、磯 友輝子(東京未来大学モチベーション行動科学部准教授)、川角公乃(学習院大学人文科学研究科博士後期課程)、土倉玲子(北星学園大学短期大学部)、寺井あすか(東京工業大学グローバルエッジ研究院テニユア・トラック助教)、渡邊芳之(帯広畜産大学人間科学研究部門)、渡部 幹(早稲田大学大学院経済学術院)、渋谷由紀(神田外語大学国際コミュニケーション学科専任講師)、塚本恵信(相山女学園大学人間関係研究機構)、境 忠宏(淑徳大学経営学部)、新井洋輔(東京福祉大学心理学部講師)、中西茂行(金沢学院大学文学部)、井上かおり(大阪音楽大学教養教育部会助教)、砂沢健(特定非営利活動法人千葉精神保健福祉ネット)、片岡由佳(北海道枝幸郡枝幸町立枝幸小学校)、安藤直樹(ユマニテク医療福祉大学校非常勤講師)、古川久敬(日本経済大学大学院経営学研究科専任教授)、豊島昇(早稲田大学アジア研究機構アジア研究所招聘研究員)、有泉優里(放送大学教養学部非常勤講師)、鈴木万希枝(東京工科大学

教養学環)、尾見康博(山梨大学大学院教育学研究科)、野崎瑞樹(東洋大学大学院博士後期課程)、山田弘司(酪農学園大学循環農学類教授)、菊池浩人(防衛省技術研究本部先進技術推進センター主任研究官)、梶間幹男(富山少年鑑別所法務技官兼法務教官統括専門官)、難波淳子(独立行政法人国立病院機構岡山医療センター附属岡山看護助産学校)、北沢紀誉(飯田市役所子育て支援課)、阿部晋吾(梅花女子大学心理こども学部心理学科准教授)、竹村和久(早稲田大学文学学術院)、瀧本 誓(道都大学社会福祉学部)、安達正嗣(高崎健康福祉大学健康福祉学部社会福祉学科)、岡本卓也(信州大学人文学部准教授)、小林麻子(文教大学生活科学研究科)、山田 歩(東京大学大学院情報学環特任助教)、野寺 綾(日本福祉大学全学教育センター研究員)、竹村幸祐(京都大学経営管理大学院特定助教)、大久保暢俊(東洋大学エコ・フィロソフィ学際研究イニシアティブ)、竹橋洋毅(東京未来大学モチベーション行動科学部講師)、松井博史(株式会社マイクロン臨床開発部)、道家瑠見子(一橋大学大学院社会学研究科科学研究費研究員)、堀江尚子(奈良県立医科大学医学部看護学科講師)、松本友一郎(中京大学心理学部講師)、本田周二(鳴門教育大学予防教育科学センター研究補佐員)、細川隆史(東洋大学人間科学総合研究所)、田中健太郎((株)博報堂)、石井佑可子(藤女子大学文学部)、毛 新華(神戸学院大学人文学部人間心理学科講師)、辻川典文(神戸親和女子大学発達教育学部講師)、田島 祥(関東学園大学経済学部講師)、吉原克枝(福岡工業大学短期大学部准教授)、加藤恭子(立教大学社会学部メディア社会学科兼任講師)、高橋 均(山口学芸大学)、矢崎裕美子(日本福祉大学全学教育センター助教)、小島奈々恵(広島大学保健管理センター)、菅忍(宮崎市役所廃棄物対策課主査)、菅 知絵美(東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野特任研究員)、片岡 祥(久留米大学比較文化研究所研究員)、中川朝美(岩手大学大学院機械・社会環境システム工学専攻博士課程)、小宮あすか(神戸大学特命助教)、柳澤邦昭(日本学術振興会(京都大学大学院教育学研究科)特別研究員)、江口圭一(立教大学大学院ビジネスデザイン研究科)、石橋里美(芝浦工業大学、東京国際大学、鎌倉女子大学非常勤)、日高友郎(福島

県立医科大学医学部助手)、橋本博文(東京大学大学院人文社会系研究室)、大谷宗啓(滋賀大学)、井邑智哉(広島大学心理臨床センター客員研究員)、服部陽介(東京大学大学院総合文化研究科)、足立邦子(大阪市立大学大学院医学系研究科脳科学講座研究員)、早坂三郎(芦屋大学客員教授)、綿村英一郎(慶應義塾大学文学部・日本学術振興会大学訪問研究員)、野中陽一郎(兵庫教育大学教職キャリア開発センター特命助教)、藤井 勉(誠信女子大学専任講師)、高森順子(阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター資料室震災資料専門員)、趙善英(早稲田大学文学学術院文学部講師)、森下右知代(エミレーツ航空会社)、谷口友梨(大阪市立大学大学院)、井川純一(広島大学大学院総合科学研究科)、岡田安功(公益財団法人鉄道総合技術研究所)、高浦佑介(東京大学大学院新領域創成科学研究科)、松原詩緒(立正大学助教)、冨澤和香子(北

海道社会福祉事業団もなみ学園)、鬼頭(桂川)美江(北海道大学大学院文学研究科社会心理学研究室・日本学術振興会)、桑原裕子(筑波大学大学院人間総合科学研究科非常勤職員)、佐柳信男(山梨英和大学准教授)、濱野裕貴子(株式会社エスアイテック キャリアカウンセラー)

### 『社会心理学研究』掲載予定論文

■第28巻第2号(2012年11月刊行予定)

《原著》

高 史明・雨宮有里「在日コリアンに対する古典的／現代的レイシズムについての基礎的検討」

大藪博記・渡部幹・吉川左紀子「表情・言語的シグナルに対する罰行使行動の検討」

### 編集後記

社会心理学会会報の編集を担当しております范知善と申します。毎年行われる社会

心理学会大会は外国人留学生である私にとっては特に大きな意味があります。大会に参加し発表をさせていただく・みなさんの発表をお聞きするという学会本来の楽しみと、今まで行ったことのない所へ旅するという楽しみもあります。今回の大会でも、たくさんの方々との出会い、再会、そして筑波の秋を楽しみにしております。

### メール・ニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。

E-mail: [jssp-post@bunken.co.jp](mailto:jssp-post@bunken.co.jp)

掲載料: 1件(1回あたり)1,000円  
(後日事務局より請求書をお送りします。)